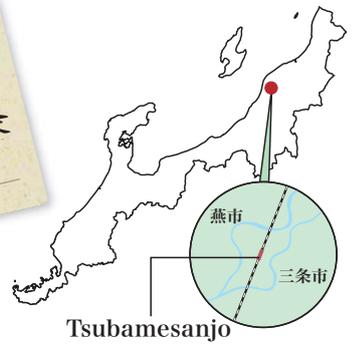




支部見聞録 (信越支部)

From 燕三条



▲諏訪田製作所の鍛造工程。金属の色で温度を感じ取り、1丁1丁叩いていく

世界に技術を誇る 金属加工の地はいま

新潟県央の燕三条地域は、金属産業を中心とした「ものづくりのまち」として知られている。江戸時代以来、時代の変遷と幾多の荒波を乗り越え、現在「伝統のものづくり」と「先端技術」が調和する金属加工業の集積地として、世界にその名を発信する燕三条へ。活力の秘密と明日へ向かっての取り組みを訪ねよう。

歴史と技術の集積が育む「強さ」

上越新幹線の燕三条駅前には、ビジネスホテルや公的機関のビルがまばらに建つ、いささか閑散とした風景が広がっている。「日本が誇る金属産業の地」をイメージして駅に降り立つと、拍子抜けするかもしれない。実は燕と三条は隣接する別々の市で、新幹線の駅は市境のかつて何もなかった場所に築かれている。燕の中心地は燕三条駅の西、中之口川の向こう側に、三条の中心地は駅の東、信濃川の対岸に広がる。現在ステンレスを中心とした金属洋食器やハウスウェア(ホーム用品、キッチン・調理用品)製造で知られる燕と、刃物や作業工具で名高い三条は、相互補完的に関わりつつ互いに刺激合いながら発展してきた。2012(平成24)年現在のデータで、2市に4名以上の従業員を擁する事業所数が約1,300社。製造品出荷額は約6,467億円で、8割を金属・機械製品が占めている。

「実は燕三条では製造業の8割が従業員20人以下。中小企業が主体ですが、バブル崩壊以降の景気低迷や度重なる逆風のなかでもへこたれない、粘り強さを持っています」。

そう語るの、一般財団法人燕三条地場産業振興センターの産業振興部長の佐藤一男さん。底力の強さを生む要因は様々あるが、多くは江戸時代以来のものづくりの歴史のなかで培われ



▲燕三条地場産業振興センターの施設、リサーチコア内のフロアには、すぐれた製品の数々が展示されている

◀多種の鋤を使って、打ち延ばし・打ち縮めて仕上げられた鋤起銅器(深海晃一作・燕市産業史料館所蔵)

てきた。この地の金属加工は、17世紀の初頭、代官が江戸から和釘の鍛冶職人を招き、農民の副業として製造を奨励したことに始まるといわれる。例えば燕の場合では、明治になって和釘が洋釘に駆逐されると鋤起銅器(銅板から叩き出して作る器などの造形)や煙管の製造に、さらに国内外の需要を捉えてナイフやフォークなどの洋食器製造に進出。終戦後、進駐軍からの注文を機にハウスウェア製造に活路を見出した。何度も時代の変動や需要の転換を経験し、時にはピンチもチャンスに変えて、培ってきた技術を活かして道を切り拓いてきている。常に先を見て変化の波を乗り越えてきた遺伝子が、ここには息づいているのだ。

「事業の大小にかかわらず、製造現場にも強く企画や営業にも飛び回るスーパーマン社長が多く、常に先を考えながら舵取りしていることも強みの一つです」。

製品の機能を高めるのはもちろん、デザイナーとのコラボレーションで斬新なフォルムの製品を創り出したり、新規分野の商品開発など新たな取り組みにも意欲的だ。例えば吉田金属工業のグローバルナイフや鋤起銅器の老舗玉川堂の銅製酒器、諏訪田製作所の爪切りニッパーをはじめ、素晴らしい性能とデザインで世界に愛用者を広げるブランドも少なくない。

新たなネットワークを広げて価値を創造

また、こうした金物や洋食器、ハウスウェアといった製品製造と並行して、加工だけの受注や、パーツの生産も燕三条では盛んで、むしろこちらの方が多くを占めているという。分業化も非常に進んでいて、プレス加工、機械加工、鋳造、鍛造、溶接、メッキや

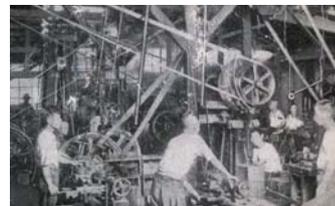


◀ 刃物産業は三条で発展したものが、「燕三条」という枠組みでのブランド化もすすむ

▶ 先進機器を使った製造も盛んだ。写真は(株)齋鐵のサーボプレスのロボットライン



▲ 燕三条地場産業振興センター メッセピアの製品展示



▲ 昭和5年の工場 (燕物産(株)パンフレットより)

◀ 昭和30年代燕駅前前のジオラマ (*燕市産業史料館展示(上・左))

コーティングなどの表面処理、印刷などの表面加工、研磨、熱処理などの技術が集積し、高度な技を誇っている。例えば難しいとされるステンレスの深絞りプレス加工や削り出し、チタンなど先端材料の加工もお手のもの。溶接のみ、サビ取り専門、磨き専業といった業者もある。

「こうしたものづくりの仕組みが整っているおかげで、自社の専門外の加工も含めたパーツ製造の注文が来た場合でも、協力業者にはこと欠かず、対応が容易です。こうしたことも燕三条の強みでしょうね」と、佐藤さん。加えて、燕三条では一つの受注先に依存せず、複数から分散受注している事業所が多く、一つ二つ受注が途切れても耐えるだけの体力があるという。最近では円安を追い風に、空前の活況を見せる企業も少なくない。

数々の強みがあるとはいえ、もちろん問題もある。小規模な業者は営業力に欠け、技術の継承や後継者の問題も深刻で、行政や業界団体では様々な施策を行っている。例えば加工業者のなかでも個人や夫婦単位などとりわけ小規模業者の割合が多い「磨き屋」と呼ばれる研磨業者に関しては、燕市の商工会議所が「磨き屋シンジケート」を構築して共同受注を行っている。昨夏には、NHKの番組「限界に挑め!ニッポンのものづくり 超絶

すこわざ 凄技」にシンジケートきっての熟練者が挑戦し、磨いたパラボラで光を集めてその熱で金属を溶かすことに成功、職人技の凄さを示して話題を呼んだ。また、技術継承や後継者問題には燕市が「磨き屋一番館」を開設、燕研磨振興協同組合が研修生の指導や新規開業者の支援にあたっている。

市域を超えた連携も進められ、燕三条地場産業振興センターでは1986(昭和61)年に設立以来、燕三条ブランドの確立や見本市への出展、ビジネスマッチング、情報発信など産業支援を進め、積極的に情報を発信し、内外の企業との連携を広げて新しい価値の創造を目指している。広く技術をPRして事業連携を目指す「ものづくりメッセ」は、同センターが毎年10月はじめに行う恒例行事で、昨年は203社・団体が出展。また、「どんな加工業者があるのか」「どんな製造が可能か」「こんな製品を扱う企業を探したい」といった照会に応じる総合窓口も開設、約700社が登録し、年間800件の問い合わせを受けているという。

新たなネットワークを広げ、燕三条の強みをいかに活かして、価格競争を超える価値をつくり、明日を築いていくか。かつてそうしてきたように道を切り拓きながら、この地の「ものづくり」の足取りは、今日も力強い。



▲ 工場をスタイリッシュに建て替え、工場を見学できるオープンファクトリーとした新しい取り組みも(株)諏訪田製作所)



▲ 諏訪田製作所の研磨研削工程。研磨資材を変えて、本体を削り出し、滑らかに仕上げていく



◀ 磨き屋一番館のタンブラーのサンプル。左半分が磨いた後の状態で、びかびかに仕上がっている

◀ 研修生による、バフという道具を使った、研磨の様子。バフの種類を変えながら、均一に滑らかに仕上げていく

◀ 鍛造した鉄は上質の部分だけを使う。使わない部分(写真)が7割を占めるといふから驚きだ

別冊 FROMはウェブサイトへ
 eふぁみり もあわせてご覧ください!
<http://jp.fujitsu.com/family/honbu/family/>
 「職人の町だからこそ生まれたラーメンの味」をご紹介します。